

グリフィスと明治日本

1871年12月、G.フルベッキがかつての長崎での生徒である大隈重信に提言した世界視察団構想が、首脳岩倉具視自ら率いる形で実現する。翌年3月6日、一行が米国連邦議会に招かれた日をもって、W.E.グリフィスは世界史という舞台に日本が自ら登場したとみなし、主著 *The Mikado's Empire* (皇国) 第一部の最後を飾るエピソードとした。

外圧は明治維新の原因ではない。日本の近代化は外国人によってではなく、この国の人間が指し示した道であり、だからこそ成功した。それが、グリフィスが『皇国』で示した結論である。

・徳川政権は正当性を持たない。天皇のみが真の君主であり、諸侯も皆その臣下にすぎない。大政奉還も廃藩置県も、日本史において何世紀も準備されて決行された革命であり、外国人が来ずともいずれ幕府および封建制は倒れた。諸侯の分立とそれを前提とする徳川体制は、国力結集の最大の障碍だった。日本は多くの外国人が感じたような、中世社会からの飛躍を一夜にして成したわけではない。日本史には近代化を志向する思想潮流が脈々と流れていた。そして日本史において最も強靱な政治的力の源泉は、常に尊王だった。・

このような歴史観を英語で最も早くから披瀝し、世界に発信し続けた米国人を、明治日本の要人たちが尊び、叙勲・再来日に至ったのは当然だった。

グリフィスがニューブランズウィックで接した日本人留学生には、横井小楠の甥ふたりの他にも、岩倉具視の息子(具定、具経)、勝安房(海舟)の息子(小鹿。後、米国海軍兵学校で学ぶ)ら明治日本の要人たちの子弟がいた。海舟は福井滞在中のグリフィスに連絡を取り、徳川宗家を知事とする静岡藩にも彼のような優秀な教師を紹介してほしいと依頼する。かくてグリフィスの親友 E.W. クラークもまた来日し、静岡と東京で教鞭を執った。クラークが後に「誰よりも尊敬する」人について著した書が *Katz Awa* である。また帰国後グリフィスと同じく牧師の道を歩んだクラークは、日本にキリスト信仰の種を蒔いてもいる。福井から東京へ向かうグリフィスに静岡の地で再会したクラークが彼に紹介した旧幕臣中村正直は、留学生を監督する任務で渡英した経験があり、東京でもふたりと親交を結んだ。中村は明治六年の布教解禁前に堂々とキリスト教を擁護し、後に自らも受洗した。中村や福沢諭吉、そして旧幕府洋学校の教官たちが結集した日本初の近代的学会組織「明六社」に、唯一の外国人メンバーとしてグリフィスも参加する。日本語で国民の啓蒙に努めた彼ら日本知識人の著作と活動こそ、日本近代化の何よりの推進力とグリフィスは評価している。

明六社の社長を辞退した福沢に代わってその任に就いた森有礼は、幕末に薩摩藩からイギリスに派遣された留学生時代、さらなる可能性を求めて大西洋を渡っている。この時共に渡米した薩摩人に、ラトガースで日下部の同窓となる畠山義成がいた。畠山の紹介状を携えて来日したグリフィスは、福井赴任前に東京で高官たちや森に会う。畠山は岩倉使節団を現地で支え、グリフィスの開成学校（南校の後身。後の東京大学）在職時にはその校長だったが、早世した。

少年時代、横浜で宣教師 J.C.ヘボン（ローマ字で有名）や J.H.バラ（ラトガース大卒）の夫人に英語を学んだ高橋是清は、十代前半で勝小鹿と同じ船で渡米した。現地では奴隸的奉公人として売られる辛苦を嘗めたが、帰国して森有礼の書生となった後、フルベッキの屋敷に住んで南校で教えた。辞職して数年後、生徒として開成学校に入り直し、グリフィスの講義を受ける。日本文化の研究に余念のないグリフィスは、高橋に『膝栗毛』を口頭で英訳させて書き留めた。東京ではグリフィスは姉マギーと同居しており（彼女も官立女学校で教えた）、女性には微妙な滑稽本の内容上、高橋はマギーに席を外してもらう必要があった。やがて、グリフィスの恩師でもあるラトガースの数学教授 D.マレーも開成の幹部として招かれ、文部省に職を得た高橋が通訳を務める。

明治日本最大の試練となった日露戦争において、高橋が戦費調達最大の功労者となった事はあまりに有名だが、講和外交を担った大臣小村寿太郎もまた、南校・開成におけるグリフィスの最も優秀な生徒のひとりだった。その後、小村は第一回文部省派遣留学生としてハーヴァード大学で学び、外務省入省後は新興国の厳しい外交の前線に立ち続け、その国際的地位向上を実現する。

日露講和会議の仲介役を務めたセオドア・ローズヴェルトは、グリフィスが牧師として長く暮らし、結婚し、余生を送ったあと永眠の地となったニューヨーク州における、オランダ移民の家系の出身である。この一族は後にもうひとりのローズヴェルト大統領を生み、彼もまたセオドア以上に日本人にとって忘れがたい存在となるが、二人は共通して海軍に執心した。横井兄弟や勝親子の見果てぬ夢だった強力な日本海軍は、巨大な産業力に支えられたグリフィスの母国の海軍によって滅ぶ。十九世紀徳川日本が知る唯一の西洋語はオランダ語だったが、当時世界を主導するのは既に英語国であり、両語に通じるオランダ系アメリカ人の歴史的存在は大きい。その人脈がグリフィスを日本に呼び寄せた。日英米蘭の先人たちが築いた関係は、前世紀の世界戦争で大きな傷を負いながら今も、その礎の上に新たな歴史を紡いでいる。セオドア・ローズヴェルトの愛読した『武士道』は永く日本の理想を世界に説いたが、その書に緒言を寄せた最初期の理解者は、W.E.グリフィスだった。